

第1回

熊本地震復興セミナー 地域の未来をつくる

自然学校「全5回」

「第1回」

人づくり

地域再生

国道も信号もコンビニもない山村の自然学校が起こした奇跡

講師・辻英之

NPO法人グリーンウッド自然体験教育センター代表理事

刃物が使えると
どんな子に育つ？

2016年4月、熊本地震発生直後に、九州の自然学校のネットワークが協力して「RQ九州」という災害ボランティア組織が発足しました。「自然学校」はキャンプや野外体験、環境教育などを行っている民間の施設や組織の総称で、人と自然や社会との関わりを学ぶ場です。阪神大震災以降は、災害の現場でも野外技術や人をつなぐ「ミニユニケーションスキル」が役立つことを実証し、緊急支援や復興支援活動を行ってきました。熊本地震から1年9カ月。被災の現場では復興に向けた新たな地域づくりが始まっています。本セミナーは、災害大国ニッポンで地域の未来をつくるために、被災地での自然学校的な手法による地域再生の可能性を広げることを目指して開催します。

日時：2018年1月23日(火)
18:30～21:00

場所：益城町交流情報センター会議室
熊本県上益城郡益城町木山236

参加費：無料

定員：30名

申込み：<http://rq-center.jp/seminar/2369>



主催：一般社団法人RQ災害教育センター
共催：RQ九州、九州自然学校協議会
協力：一般社団法人アイ・オー・イー

本セミナーは、2017年度地球環境基金の助成を受けて開催します。



辻 英之(つじひでゆき)

NPO法人グリーンウッド自然体験教育センター代表理事。1970年福井県生まれ。人口1700人の泰阜村に移住して23年。「何も無い村」における「教育」の産業化に成功した。村の暮らしの文化に内在する教育力を信じぬき、関わる人々全てに学びがある質の高い教育を提供する傍ら、立教大学・九州大学・名古屋短期大学・飯田女子短期大学非常勤講師など、「教育立村」をテーマとした講演・講義に全国を飛び回っている。また、現在、「泰阜村総合戦略推進官」として「教育立村」の実現に向けて奔走する日々である。著書に『奇跡のむらの物語 1000人の子どもが限界集落を救う!』(2011年 農文協)

▼衝撃を受けたらばつちの暮らし
中途半端は通用しない

福井県で生まれ育って北海道大学教育学部へ。ハンドボールで全国を股にかける活躍をしていたのが辻英之さんだ。だが、1992年当時の学校制度の中で普通に教員になって教壇に立つ、という将来の自分に違和感を覚えていた。

「卒業後2年ぐらいいは、海外青年協力隊のような学校の外の学びの場を求めてみるのもいいかもしれない」。その先のイメージも「離島や山間の小学校の先生だった。そんなとき、たまたまアウトドア雑誌で見つけたのが、NPO法人グリーンウッド自然体験教育センターの前身である「だいらぼつち」のボランティア募集記事。

教育実習で福井に戻った折に立ち寄った泰阜村。雨の中、バイクでたどり着いた辻さんの目に、だいらぼつちの子どもたちの姿はあまりにも鮮烈に映った。「ポロポロな農家で子どもたちが薪を割ってお風呂を焚いて暮らしている。まるでドラマ『北の国から』に描かれているような生活が現実にあった」

衝撃を受けた辻さんは、当時の代表の村上忠明さんに手紙を書いた。

「今すぐ中退してでもそちらに行きたい。そしてさらけ出して怒られまわしてね。そんな中途半端なヤツはいらん。きちんと卒業して、自分なりの武器を持って来いと。本気度を試されてたんですね」

すでに11月になっていたが、辻さんは手付かずだった卒論を死ぬ気で書き上げた。しかし、だいらぼつちへの進路について

は「親は泣くし、先生も友人もおまえ正気か?と。まだNPOなんてない時代ですか、社会的な認知もなかったんですね」

▼スタッフもいない給料も出ない!?
村の持続が最優先課題

だいらぼつちは、東京で幼稚園教諭を勤めていた梶さち子さん(現グリーンウッド会長)が、「もつと自由で子どもを主体性を大事にした教育ができないか?」とスタート。山村留学やキャンプといった教育活動に、理解や評価が得られている時代ではなかったが、梶さんはこの地を選び、たった一人でこの村にやって来た。それは、村の人々の「日常の営み」こそが、彼女の教育理念をそのまま体現するものだったからだ。

しかし、辻さんが赴任してきた当時はもうやめよう」という話が出るほど行き詰まっていた。現金収入といえは夏のキャンプだけ。過疎化が進み村の存続自体も危ぶまれる中で、スタッフはいなくなり、辻さんには、子どもへの世話や学校との対応、山や川の安全管理など、ありとあらゆる責任がいきなり任された。やり甲斐はあったが、別の収入手段も生み出さねば給料もままならない。

とはいえ、収入のために本業を手薄にして都市へ働きに行くようでは、本末転倒だ。村自体が急速に先細っているの、おいしいところだけ利用しようという態度では村の人はすぐに見抜く。そもそも自分たちは何のためにここにいるのか。過疎の村では、人が一人でも減ることはすなわち生活共同体としての持続性の衰退を意味する。村がそのまま衰退して行けば、当然

▼郷会の子どもたちが村に自信をくれる
地域との団結が
飛躍の鍵

グリーンウッドの未来もない。「本業で村に貢献したいと願う」つつ、辻さんは自治会の活動やお祭りなどの行事への参加、小中学校との連携などに積極的に関わっていた。「自治活動に参加すればするほど、地域がよくなる。地域がよくなれば、僕らの教育活動の質も向上する。理念だけではダメで、まずは自分たちが地域に根ざし、村の暮らしから学ぼうと。そう覚悟しました」

村議会議長の木下藤恒さんとの出会いは99年、辻さんが29歳のとき。文部省から自然体験学習をやらなにかという話を持ち込まれたのだ。

「村にまともな収入をもらえずチャンスですし、役場も、僕らみたいのがいるからなんとかならんじやないかと乗り気です。そのときの実行委員長が、木下さんだった。」

「イヤイヤ実行委員長にされてしまった人で、僕が何か発言するたびに、睨みつけてくるんですね。俺がなんでこんな若造と一緒にやらにやいかんのかと(笑)」

ところが企画をスタートしたとたん、木下さんのみならず村の人たちからは「あれもやりたい、これもやりたい」と、アイデアや申し出が続出。「それを調整するのが僕らなのですが、木下さんの人脈と行動力にどれだけお世話話になったか」

「山猿」と村の人たちからも言われる木下さんは、村の一番奥にある4戸しかない限界集落の住民だ。電気が引かれたのは昭和40年、木下さんにとってその集落に住むことは、近代化に取り残されたというコンプレックスでしかなかった。「こんな山どかしたい」が口癖の木下さんは1000万円の私財を投じ、村の生き残りを賭けてアマゴの養殖事業を立ち上げて大成功させた実績を持っていた。

「その年の参加者はわずか20人ほどでお金は入らなかつたけれど、初めて本業で村と連携できた。その手応えが大きかった」

キャンプが終わると、木下さんが言った。「辻、ワシは生まれ変わったら教師になりたい」

「やって来た子どもがな、誉めるんだ。おじさんすごい! 星がいっぱい! この水きれいな、飲める! ワシらには当たり前のもなのに」。誰も住みながら不便な山村を



否定してきただが、目の前にある宝物の価値を、都会から来た子どもたちが教えてくれた。「本当に大事なものを、ワシは自分の息子や村の子たちに何も教えて来なかつた」

それ以後、新たな企画が持ち上がるたびに、木下さんは「ワシが実行委員長をやる!」と自ら手を挙げ、予算を取り、人を動かし、リーダーとして積極的に動いてくれるようになったという。

木下さんをはじめ地域の人たちとの団結ができたことで、グリーンウッドは2000年から軌道に乗った。今では、夏のキャンプで毎年千数百人も参加者を集め、村の経済に寄与する事業に成長している。

キャンプでの食事は、地元のおばちゃんとの契約栽培の野菜が9割以上を占める。朝取りのキュウリは昼には子供たちのお腹に収まり、夕方には「ありがとう!」

「ここは何もない村だけど、じつは、いざとなれば何でもある村。何でも生み出せる村。それを子どもたちに伝えていきたいと語る辻さんは、やはり教師になることが天命だったように見える。」

「田舎で働きたい——田舎で働きたい——案内人に聞くと(2011年 NPO法人日本エッセイストズ)」から引用